

80 姥捨山（八）（馬の親子）

六十になったらですね、仕事もできないから、物ばかり食べて。アムトのヒチャー（岩戸の下）に連れて行ってですね。それはティール（籠）といったんですがね。それはね、芋を入れてですね。

「お前の食べ物ほそれだけだから、それだけ食べたら死んでしまえ」と言つて、アムトのヒチャーに連れて行きよつたですよ。そういう話もあるんじゃないが。

それが直つたのはこうらしいです。ある部落ですね、白い馬を二つ、まあ、道から貰つたか、どっから取つて来たそうですね、親か子かわからんらしいですよ。この生きているのが。だからある人が、

「アムトのヒチャーに連れて行つたあるお爺はそんなものよくわかるから」言うてね、二、三名連れて聞きに行つたらいいですね。

「あなたがたは、そのぐらいもわからんか」言うてですね、

「それやったらね、寒い時にですね、風のある時に二つ並べなさい。親は風の上に立つ。子は下になる」つて、そう言つたらいいですね。それから、
「ああ、年寄りほ宝だから、これ捨てて行つてはいかん」と言つた。それから直つたという話もあるんですが。

字賀数 新田繁一